

第642回月例研究会 講演要旨 (2026年3月19日講演)

よくみる呼吸器疾患の
最新の治療～肺気腫に気管支鏡治療??
他いろいろ始まっています～神奈川県立循環器呼吸器病センター 呼吸器内科
部長 萩原 恵里氏

呼吸器内科にインターベンション?と
感じる先生もいらっしゃるかもしれない。
今まで気管支鏡以外ほとんどなかった呼
吸器内科の分野にも、インターベンショ
ンの波が押し寄せてきている。当院では
2024年に気管支鏡治療センターを開設し、
様々なインターベンションを全国に先駆
けて導入している。ここでは、その中で
も先生方に一番近い呼吸器疾患の一つで
あるCOPD (肺気腫) に対して行われる最
新のインターベンション技術をご紹介します。

重症COPDには、以前には呼吸器外科に
よる肺容量減量術が行われていたが、術
後リスクが高いこともあり、あまり行
われなくなっていた。その後急速に進
歩したのが、気管支鏡下肺容量減量術
(Bronchoscopic Lung Volume Reduction :
BLVR)、通称“バルブ治療”である。外
科手術に代わって、気管支鏡を用いて過
膨張になっている肺の入口の気管支に一

方向弁を留置し、肺容量を減量させて呼吸
困難を改善させる、という低侵襲の治療で
ある。留置する弁は、呼気は呼出され吸気
には閉じるようになっていて、無気肺を形
成することで横隔膜の可動性が回復し、息
切れ症状の改善が期待される。適応は%
FEV1 (1秒量の予測値) が気管支拡張薬使
用後でも15%以上45%以下の重症COPDが
目安であり、体プレチスモグラフィによる
全肺気量などの測定やCT解析による標的
分析を確認してから慎重に判断する。

バルブ治療は2023年12月に保険適用と
なり、実質2024年からの始動であり、全
国でもまだ実施可能な施設は限られてい
る。現在神奈川県では聖マリアンナ医大病
院と当院の2施設で実施することができる。
適応をきちんと見定めれば、今まであきら
めていた息切れ症状の改善が期待できる新
しい治療であり、選択肢の一つとして知っ
ておいていただければと思う。

次いで最近進歩したインターベンショ
ン治療に挙げられるのは、血痰・喀血に
対する気管支動脈塞栓術(Bronchial artery
embolization : BAE) である。2024年に初
めて日本呼吸器内視鏡学会から喀血診療
指針が出版され、重症度が分類されて治
療アプローチが明確に示された。それ
により、今まで経験的に行われてきたBAE
が、一定の指針のもとで自信をもって行
えるようになった。特に塞栓材料も以前
よりリスクが低く塞栓効果が高い金属コ
イルを使うようになり、QOL向上のため
の相対的適応の方にも安心して行えるよ
うになった。当院では放射線科でなく呼
吸器内科で塞栓術を行っており、今まで
仕方がないとあきらめていた気管支拡張
症や肺非結核性抗酸菌症などによる繰り返
す血痰・喀血の方にも、積極的に適応
を検討している。また、その指針の中
でも言及されている、気管支鏡的充填術
(Endobronchial Watanabe Spigot : EWS)
も血痰・喀血に対する選択肢の一つであ
る。EWSは手術の困難な気胸などにも有
用な手技であり、BAE・EWSいずれも熟
練の必要なインターベンションであるが、
有用性は高い。

インターベンション以外での新しい治
療法といえば、近年ネブライザータイプ
の吸入による治療が増えてきている。そ
の中でも肺MAC症に対するリポソーム化
AMK吸入液 (アリケイス®) は難治性肺
MAC症に対し一定の評価を確立してい
る。毎日自宅で機器を使って吸入する必
要があり、真面目な人・几帳面な人でな

いと継続が難しいが、選択肢の少なかつ
た領域に新しい風を吹き込んだ。それ
に続いて、呼吸器疾患に伴う肺高血圧症
に対するトレプロスト吸入療法や、まれな
疾患ではあるが肺胞蛋白症に対するサル
グマリン吸入療法など、いずれも高価で
手間もかかるが効果が期待できる吸入療
法が多く出てきている。

最後に、間質性肺炎については治療だ
けでなく診断についても言及したい。
間質性肺炎は、がんなどの悪性疾患と異
なり、大きな組織を採取して全体の構造
変化を俯瞰することが必要であり、従来
の気管支鏡生検では診断が困難であった。
当院も採算度外視で行っていたクライオ
バイオプシー (経気管支凍結生検法) が
2020年によく正式な算定項目となり、
クライオ生検で大きく採取した組織の病
理診断医と、放射線専門医、そして呼吸
器内科専門医の3者がMulti Disciplinary
Discussion (多分野集学的検討 : MDD)
を行って診断をつけることによって正確
な診断が行われるようになった。この
MDDに関しては、診療報酬への反映が検
討されており、2024年度にも期待され
たが残念ながら持ち越しとなっていたも
ので、2026年度は期待できるかもしれない。

以上、ふだん製薬会社のWEB講演会
ではなかなか接する機会のない新しい呼
吸器領域の治療法、特にインターベン
ション治療を中心に、当日は自験例を含
めて共有したい。